

## 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 23 日現在

機関番号：35402

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2011～2012

課題番号：23700735

研究課題名（和文）専門志向化の概念を援用したスポーツイベントへの継続参加行動に関する研究

研究課題名（英文）A study on continuous participation in sport events applying the concept of specialization

研究代表者

岡安 功（OKAYASU ISAO）

広島経済大学・経済学部・准教授

研究者番号：90551664

研究成果の概要（和文）：本研究は、専門志向化の概念を援用してスポーツイベント、特にマラソン大会への継続参加行動の関連を明確にする事を目的にした。一般ランナーのタイプの違いと継続参加要因との関係について検証を行った。結果からは、専門志向化の概念を援用した一般ランナーの類型化に関する指標を二つ抽出した。一つは、ランナーに志向に関するものであり、もう一つはランナーのとして総合的能力に関連してものである。また継続参加要因との関連性に関しては、一般ランナーの大会への継続参加に関して一定の共通する部分がある事が示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to investigate people's continuous participation in sports events, especially in marathon races, applying the concept of specialization. The study is focused on the relationship between the types of average runners and the factors of continuous participation. The results indicate two types of classification based on the concept of specialization. One is related to the runners' intention and the other is related to the overall ability of the runners. Regarding with association of continuous participation, this study suggested common factors in general runners. As for the association of the continuous participation, the study suggests that there are some parts in common when they participate in races or events continuously.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	700,000	210,000	910,000

研究分野：スポーツ科学

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学、スポーツ科学

キーワード：スポーツイベント、専門志向化、マラソン大会、継続参加行動、類型化

## 1. 研究開始当初の背景

近年、マラソンやジョギングに大きな注目が寄せられている。レジャー白書（2012）によれば、ジョギングの参加人口は 2,590 万人となり、これは水泳（プールでの）が 1,290 万人である事などと比べると人気がある種目となっている。また、スポーツライフデータ（2010）によれば、週 1 回以上走っている人は 436 万人（2006 年と比較して 139 万人増）、

週 2 回以上走っている人は 301 万人（2006 年と比較して 86 万人増）であった。つまり、生涯スポーツとしてマラソンやジョギングが多くの人に位置づけられていることがうかがえる。

また、スポーツイベントとしてのマラソンにも注目が寄せられている。たとえば、2012 年開催の東京マラソンでは、定員の約 9 倍のエントリーがあった。またこうした状況をも

うけて、大阪、神戸さらに京都などの大都市でもマラソン大会が開催され人気を集めている。こうしたスポーツイベントは、スポーツ振興だけでなく、地域・観光振興を目的にして開催されている。そして、こうしたイベントを、生涯スポーツイベントと呼ぶ。生涯スポーツイベントについて山口(1996)は、様々な社会文化的効果が期待されていると指摘している。

研究としてのスポーツイベントは、1990年代より様々な視点で行われてきた(野川・菊池・山口・長ヶ原, 1991; Crompton, 1994; Mayfield & Crompton, 1995; Scott, 1996; Gibson, 1998; Raybould, 1998; Ryan & Lockyer, 2002; McGehee & Yoon, Cardenas, 2003; Wilson, 2006; Hyejin, Doyeon & Yongjae, 2009; Kaplanidou & Vogt, 2010; John, Sangkwon & Mark, 2012)。こうした先行研究の中でマラソン大会参加者に着目して継続参加要因について研究を行ってきたものの一つとして、岡安・野川(2007)を挙げる事が出来る。この研究は、交換理論が参加型スポーツイベントにおいて適用可能であるのか、交換理論の命題を先行研究に当てはめながら検討を行い、理論援用の妥当性が明確になった。また Okayasu, Nogawa & Morais(2009)においては、Foa & Foa(1974)の資源交換理論の視点から、継続参加行動を明らかにするための質問項目の作成を行った。そして作成した質問項目の妥当性・信頼性を検証した。そして、以下のことが明らかになった。まず、イベント主催者側から参加者へ提供される資源は、「愛着」「地位」「情報」「サービス」「金銭」の5つがある事が明確になった。一方で、「愛着」「地位」「サービス」の3つの資源が参加者からイベント主催者に提供されることが明確になった。たとえば、参加者がイベントからのやさしさを感じる、それに対して参加者がイベントに対して親しみをもつという交換もある事が明らかになっている。

## 2. 研究の目的

先行研究を概観する中で、これまでの研究は、継続参加要因を明らかにするのみであり、参加者を細分化して、より詳細な参加者の状況を検証するまでには至っていない。近年のマラソン大会の参加者は、これまでの参加者とは異なり新しいタイプの参加者も増加している。

そこで本研究では、参加者を細分化する方法としてレジャー・レクリエーションの分野で北米を中心に約30年にわたって研究が進められてきた Bryan(1977)が提唱したレクリエーションの専門志向化の概念を援用し、マラソン大会への継続参加行動について検証する。この概念は、同じ種目のレクリエーシ

ョン活動を行う参加者間において、技術や経験などのレベルによって考え方が違うというものである。そして、原田(1982)や二宮・菊池・守能(2002)、さらに工藤・二宮・石澤(2011)によって日本にも紹介され、スポーツ活動などの研究に応用されている。たとえば、二宮ら(2002)は、専門志向化の概念の研究動向と方法論について検討を行い、参加者を同質の集団に類型化するために有効な概念的枠組みを提示することが出来たと報告している。

## 3. 研究の方法

本研究は、インタビュー調査と質問紙調査を実施した。まず、ランニングやジョギングに関連する3名の専門家への半構造化インタビューをもとにして、一般ランナーの類型化の検証を行った。調査対象者は、ランニングイベント等をマネジメントする会社の専門家、専門雑誌の編集に携わる専門家、さらにスポーツ・メーカーでシューズ等の開発に携わる専門家の3人である。

次に、インタビュー調査をもとにして開発した専門志向化の質問項目を、マラソン大会参加のランナーに対して質問紙調査を実施した。また、上記で設定した専門志向化の類型化、また先行研究で示されている専門志向化との関連性について検証を行った。さらに、開発した類型化と継続参加に関するモデルについて検証も行った。

## 4. 研究成果

### (1) インタビュー調査の結果

マラソンに関する専門家へのインタビュー調査の結果、以下のように、ランナーを2つのタイプで示すことが出来た。

#### ① タイプ1

タイプ1は、走る事への志向で分類し、ファンランナー、一般ランナー、競技志向ランナーと命名した。そして以下の通りに各タイプのランナーを定義する事が出来た。

- ・ファンランナー：楽しく仲間と走ることを目的にしているランナー。
- ・健康志向ランナー：日常的にトレーニングし、美容や健康を目的に走っているランナー。
- ・競技志向ランナー：大会での順位やタイムにこだわり日々のトレーニングを積むランナー。

#### ② タイプ2

タイプ2は、ランナーとしての総合的能力によって分類し、初心者、中級者、上級者と命名した。そして以下の通りに各タイプのランナーを定義する事が出来た。

- ・初心者：フルマラソンの自己ベストが4時間30分以上であり、月間の走行距離は100

キロ以内であり、楽しく走ることを目的にしているランナー。

・中級者：フルマラソンの自己ベストが3時間31分～4時間30分未満であり、月間の走行距離は100～200キロ以内であり、ジョギングが生活の一部になっているランナー。

・上級者：フルマラソンの自己ベストが3時間30分以下であり、月間の走行距離が200キロ以上であり、走る・トレーニングすることが、生活の中での優先順位も高くなっているランナー。

## (2) 質問紙調査の結果

### ①第一回質問紙調査

2011年度に実施した第一回の質問紙調査の結果である。インタビュー調査で明らかになった一般ランナーの類型化を、質問紙調査によって、Bryan(1977)などが提唱する専門志向化とどんな関係があるのか、ないのかを検討した。調査を実施した湘南国際マラソンでは、246名のランナーから回答を得る事が出来た。このランナーを上記で開発した類型化に沿ってランナー自身が自らを類型化した結果は、以下の通りである。なお欠損値があったランナーの回答は削除した。

基本的な属性は、平均年齢が約40歳、男女は、男性が約73%、女性が約27%であった。ランナーの類型化についてタイプ1は、ファンランナーが84名、健康志向ランナーが87名、競技志向ランナーが55名であった。また、タイプ2については、初心者が95名、中級者が112名、上級者が34名であった。

さらにランナーの自ら示したタイプと、伝統的に示される専門志向化尺度(愛着、中心、行動)との関連性についても、検証を行った。従来の尺度として、例えば愛着面では、「ランニングは私にとって大切な日々の活動である」などを設定した。中心面では、「ランニングは私の心を満たしてくれる活動のひとつである」などを設定した。行動面では、「ランニング歴」などを設定した。

分析は、タイプ1(ファンランナー、健康志向ランナー、競技志向ランナー)、タイプ2(初級者、中級者、上級者)ともに、一元配置の分散分析を行った。分析結果は、以下のようにタイプによって、有意な差があった。

タイプ1に関しては、専門志向化の愛着面、中心面、行動面に関して、いずれに関しても、ファンランナーと競技志向ランナーとの間、健康志向ランナーと競技志向ランナーの間に5%水準で有意な差があった。

タイプ2に関しては、専門志向化の愛着面、行動面に関して、ファンランナーと競技志向ランナーとの間、健康志向ランナーと競技志向ランナーの間に5%水準で有意な差があった。

### ② 第二回質問紙調査

次に、2011年度に実施した第二回の質問紙調査であった愛媛マラソンの結果である。229名のランナーから回答を得る事が出来た。このランナーを上記で開発した類型化に沿ってランナー自身が自らを類型化した結果は、以下の通りである。なお欠損値があったランナーの回答は削除した。

ランナーの基本的な属性は、平均年齢が約41歳、男女は、男性が約76%、女性が約24%であった。類型化に関する結果は、タイプ1に関して、ファンランナーが93名、健康志向ランナーが107名、競技志向ランナーが21名であった。また、タイプ2については、初心者が156名、中級者が51名、上級者が19名であった。

さらにランナーの自ら示したタイプと、伝統的に示される専門志向化尺度(愛着、中心、行動)との関連性についても、検証を行った。分析の結果、タイプ1(ファンランナー、健康志向ランナー、競技志向ランナー)、タイプ2(初級者、中級者、上級者)ともに、一元配置の分散分析を行った。分析結果は、以下のようにタイプによって、有意な差があることが明確になった。

タイプ1に関しては、専門志向化の愛着面に関しては、ファンランナーと競技志向ランナーとの間に5%水準で有意な差があった。また行動面に関して、ファンランナーと競技志向ランナーの間、健康志向ランナーと競技志向ランナーの間に5%水準で有意な差があった。

タイプ2に関しては、専門志向化の愛着面に関して、初心者と中級者、初心者と上級者の間に5%水準で有意な差があった。中心面に関しては、初心者と中級者の間において5%水準で有意な差がみられた。さらに行動面に関しては、初心者と中級者、初心者と上級者の間において5%水準で有意な差があった。

### ③ 第三回質問紙調査

2012年度に実施した質問紙調査の結果である。愛媛マラソンにおいて173名から回答を得る事が出来た。この調査では、前年度開発した専門志向化のタイプ(1および2)とOkayasu, Nogawa & Morais(2009)で開発した継続参加の要因との関係について検証を行った。継続参加の要因に関しては、「この大会は、参加者に親切である」や「大会参加費は、手ごろな料金設定である」などの大会を一般ランナーが評価に関しての項目、また「この大会に対して、親しみを持っている」や「この大会のスタッフに好感をもっている」などの大会への一般ランナーの関与に関しての項目を設定した。

またロイヤリティに関する項目は、Dick &

Basu (1994)や Morais et al. (2004)などを参考にして、「私は、友人にこの大会へ参加をすすめる」などや Prichard et al. (1999)や Morais et al. (2004)などを参考にして「この大会への参加は、なかなかやめる事できない」となど7段階のリッカート尺度で7項目を設定した。

回答をした一般ランナーの基本的な属性は、平均年齢が約42歳、男女は、男性が約61%、女性が約39%であった。ランナーの類型化に関する結果は、ファンランナーが56名、健康志向ランナーが58名、競技志向ランナーが26名であった。また、タイプ2については、初心者が65名、中級者が52名、上級者が23名であった。

分析は、タイプ1(ファンランナー、健康志向ランナー、競技志向ランナー)、タイプ2(初級者、中級者、上級者)ともに、イベントへの参加要因との間の関係について、共分散構造分析を、それぞれ行った。本研究で採用した継続参加を説明するモデルは、Morais et al. (2004)を援用し、一般ランナーを対象にした開発した Okayasu et al. (2009)のモデルである。

タイプ1について継続参加モデルに関する分析を行った結果、 $\chi^2/df$ が3.12、GFIが0.621、AGFIが0.580、CFIは0.833、RMSEAが0.124であった。

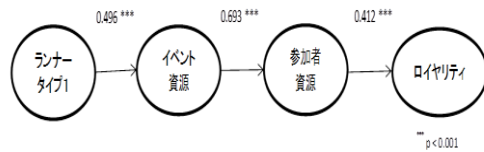


図1 タイプ1の継続参加モデル

タイプ2について継続参加モデルに関する分析を行った結果、 $\chi^2/df$ が3.11、GFIが0.620、AGFIが0.579、CFIは0.833、RMSEAが0.123であった。

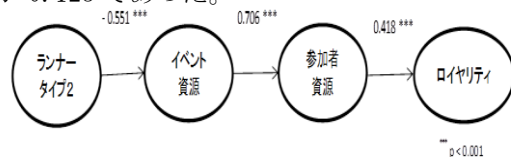


図2 タイプ2の継続参加モデル

### (3)まとめ

本研究では、専門志向化の理論を援用しながら、スポーツイベント、特にマラソン大会への継続参加要因との関係について検証を行ってきた。特に、専門志向化の考え方から一般ランナーを類型化して、継続参加要因との関係を検証した。

まず一般ランナーの類型化に関して、専門家へのインタビュー調査を実施し、更に質問紙調査を行い、従来の専門志向化との関連性などを検証した。その結果、明確に類型化の

指標を作成する事が出来た。また従来の専門志向化の考え方から導かれた指標との間にはある一定の共通部分がある一方で異なる部分があり、今後の一般ランナーを対象とした研究において活用できる類型化を開発できたと考える。また従来の専門志向化の考え方だけでは説明しきれないものが一般ランナーにあることが明確になった。つまりランナーの行動などを研究する場合、多角的な視点で行動や意識を研究する事が、より一層必要であることが明確になった。次に専門志向化の視点から開発した類型化と仮説モデルに関しては、現状では当てはまりが良い結果ではなかった。これら結果から、Bryan(1977)の提唱した専門志向化の考え方を援用して、一般ランナーの類型化を行ったが、一般ランナーのマラソン大会への継続参加に関して一定の共通する部分がある事が明確になった。

スポーツイベントのもたらす効果が期待される。一方、どのようにして一般ランナーにとって魅力あるスポーツイベントを創るのは大きな課題でもある。ランナーに選んでもらえるような魅力的なスポーツイベント、マラソン大会の開催は、今後より一層重要な問題として考えていく事が求められると考える。そしてそうした大会の開催は、今日注目されるスポーツツーリズムの発展にとっても重要な事であると考えられる。

### 5. 主な発表論文等

[学会発表] (計1件)

#### ① 岡安功・野川春夫

専門志向化からみたランナーの類型化に関する研究-専門家への半構造化インタビューを通じて-

日本生涯スポーツ学会第13回大会  
2011年10月30日、大阪産業大学

### 6. 研究組織

#### (1) 研究代表者

岡安 功 (OKAYASU ISAO)

広島経済大学・経済学部・准教授

研究者番号：90551664

#### (2) 研究分担者

#### (3) 連携研究者